

43年間開業していた飲食店「スナックるみ」(東町2丁目)を5年前に閉め、3年前から毎月2回、道の駅・道草館でリサイクル市を開いています。若いころに収集したインテリア小物や雑貨、衣類、花器類などを売り、その売上金を東日本大震災の被災地の一カ所、陸前高田市(岩手県)に送る活動を一人黙々と続けています。

「今までにトラック1台分はあったかね…。何でも1つ200円。まとめて買っただけでいく人もいるんだよ」。足りない分は自費を加えて毎年20万円ずつ5年間寄付を続けてきました。

「震災に遭った後、高田市の93歳になる元館長さんが金森家の遠縁にあたる人だと分かったの。15軒長屋の仮設住宅は、今は1棟に6、7人しかいないのよ。隙間だらけで、雪が入ってくるような所だね。せめてお正月にはお餅を買ってね…。って、12月10日になつたら送ってるの」。

これからも出来る限り寄付を続ける、といいます。

仙台出身の父、主藤甚五郎門さん(昭和12年、59歳で戦病死)、母ハルさん(没年不詳、92歳で逝去)の7人兄弟の3番目の二女として東川村の西9号北4番地で生まれ育ちました。

「厳しい父だね。お風呂場で毎日足洗わなければ、家に



入れてくれなかった」。

1954(昭和29)年、22歳で、同じ年の故一(かずいち)さん(平成3年、59歳で逝去)と恋愛結婚。娘2人を生み育てました。

「追っかけ婚だったの。身長174センチでスツとして、良い男だった。電車が吹雪で止まった時に青年団で除雪に出て、その時知り合ったの」。父親の強い反対を押し切って一緒になったそうす。

若いころは体力が弱く、2年後に体を壊して入院。退院後も農作業が出来なかったそうす。すると「尾池スーパの社長さんが、当時町に飲み屋さんが一軒もなかったから、『田んぼ仕事無理だからスナックやったら良い』ってね」。

32歳の時、自宅母屋に食堂を開き、地下にスナックを開業しました。「私ね、アルコールもたばこもダメなの。教えてもらったけれどダメだった。最初は『いらっしやいませ』も言えなかった」という店は大繁盛。

「若い時ってすごいね。子どもにお弁当を作ってたね。1日に3時間ぐらいしか寝れなくても、なんでもできるんだね。1年中無休だった」ということも懐かしい思い出です。

俳句

小春日に今朝は機上の人となり

パスポート出してながめる小春かな

初雪ふわり空のどこかに綿飴機

山眠る星は満天文響曲

初雪や君生れし日の去りし日の

小春日や雲の流れを追いかけり

小春空車椅子の友と涙する

初雪に猫差し足で小路ゆく

優しいに降る初雪は現実で

十二月電子音散るシャンデリア

あつ初雪俳句の神さま早く来て

岐登牛の紅葉のうつろい日日あらた

抱くよに友の持ち来るシクラメン

窓際の見返り美人紅葉散る

生涯を農で悔いなし大根引く

ママだから生まれてきたよ冬ぬくし

横田 則子

高瀬 潤

石澤 清宏

三島 智

若田 郁

本田 咲

佐々木 え

斎藤 夕桜

山内 みゆ

由川 真人

小林 ろば

杉山 ひろのり

保科 なほ

徳光 吐苦

杉山 りつ

こばやし 星来

